

新潟県町並みシンポジウム 第2回

新潟の町屋を見直そう

2002 | 8 | 24 | 2:00pm
土曜日 | 5:00pm

基調講演 ● 高田光雄 (京都大学助教授) 「京町家のいま」

報告 ● 「新潟下町の町屋の残存状況について」 「町屋を生かした店舗さまざま」

シンポジウム 「新潟の町屋を見直そう」

吉川真嗣 (村上町屋商人会会長)、篠田 昭 (新潟日報論説委員)、関由有子 (建築家)、
高田光雄、樋口忠彦 (新潟大学教授)、大倉 宏 (新潟下町の歴史的景観を愛する会代表)

司会進行: 岡崎篤行 (新潟大学助教授)

会場: 新潟市中央公民館5階ホール 参加費: 500円 (資料代)

新潟市西堀通6番町873-1 (NEXT21 裏手)

※申込み不要・直接会場へお越しください

主催 ● 新潟下町の歴史的景観を愛する会

協力 ● 新潟の町屋を生かす会、新潟大学都市計画研究室

後援 ● 越後村上・城下町まちなみの会、KMM研究所、建築修復学会、JIA新潟クラブ、全国町並み保存連盟、都市環境デザイン会議 (新潟)、新潟県建築士会上越支部、新潟県建築士会新潟支部、新潟県古民家ネットワーク、新潟市景観形成市民団体連絡協議会、にいがた寺町からの会、日本建築学会北陸支部新潟支所、文化財ネットワーク21、堀割再生物語プロジェクト実行委員会、村上町屋商人会

お問い合わせ ● 新潟下町の歴史的景観を愛する会 TEL.&FAX.025-260-4342 (大倉)

(財団法人ニューにいがた振興機構助成事業)

※木版画: 小林春規「刃物屋」

日本の伝統的な都市の家、
「町屋」の多面的な魅力を検証する





小林春規「満鉢屋」

新潟県町並みシンポジウム 第2回

新潟の町屋を見直そう

町屋(または町家)と聞くと京都を思い浮かべる方が多いようです。でも町屋は実は日本中にあり、もちろん新潟にもあります。まだ「残っている」と言ったほうが正確かも知れません。町屋は日本の伝統的な都市の家。規模やスタイルはさまざまですが、多くは間口が狭く奥行きが深い細長い敷地、通りに面した部分が店舗や仕事場で、奥が住まいになっている、片側に細い土間(通り土間)が裏まで抜ける、などの共通点があります。坪庭、高窓など建物が密集するなかで隣家とのプライバシーに配慮しつつ採光、通風、室内の景観などに配慮した仕掛けがしくまれていたりもします。一昨年春から始まった村上の「町屋人形さまめぐり」では、この通り土間に導かれて人々は自然になかへ迎えられ、居間に飾られた人形たちと対面することができました。町屋を改装した新潟の画廊では格子戸をはずし、外と内をつかったイベントが行われました。

戦後防火などの観点から、木造の町屋は新築や改築が制限され、生活様式の変化、再開発の波のなか、再生産されることなくひたすら減少を続けて現在に到っています。しかしこうした町屋の「やわらかさ」は、マンションなどに見る内外を隔離し、周囲への配慮を欠いた現代建築が見失ったものであり、古い建物の風格という点とあわせ、積極的に再評価しようという動きもあらわれてきました。町屋の伝統的部分を隠すのではなく、逆に生かしたりリニューアルでファッションブルな店舗を作る動きも、ひとつのトレンドとなりつつあります。

開発優先の都市政策の続くなか、町屋をめぐる環境にはまだきびしいものがありますが、それでも多くの町にまだ「残っている」町屋を今どう捉え、市民一人一人が意識していくかが、それぞれの町の今後の個性に大きく作用していくであろうことは間違いありません。

今回のシンポジウムでは「町屋問題」の先進地京都の取り組みを学ぶとともに、新潟県下や他県の町屋の活用事例を紹介し、新潟の町屋の今後をともに展望してみたいと思います。

ゲスト:高田光雄氏(たかだみつお)

1951(昭和26)年生まれ。著書に『京の町家考』(共著・京都新聞社)『町家型集合住宅』(共著・学芸出版社)『まちに住まう—大阪都市住宅史—』(共著・平凡社)『住宅の近未来像』(共著・学芸出版社)など多数。主な業績に「二段階供給方式(スケルトン・インフィル方式)の研究・開発」「町家型共同住宅(町家型集合住宅)の研究・開発」「地域型公営住宅の研究・開発」など。主な作品に「大阪ガス実験集合住宅NEXT21」「大阪府住宅供給公社東大阪吉田-2団地(次世代住宅・ふれっくすコート吉田)」など。1996(平成8)年日本建築学会賞受賞。現在、京都大学大学院工学研究科建築学専攻助教授。

このシンポジウムは、2000年11月に村上市で開かれた「新潟県町並みシンポジウム」の第2回として開催されるものです。



作図:水嶋貴之

市民の支援による移築活用計画が進行中の新潟の町屋(旧小川家)

新潟市東区島町に残る町屋旧小川家は、2001年12月に新潟大学のグループによる専門調査では、正確な年代は確定できなかったものの、明治期に建てられた可能性が高いと推定された町屋です。

道路拡張計画で春には取り壊されることになっていましたが、新潟市内の専門学校が学校施設として活用するため移築を検討することになり取り壊しが延期されました。しかし、移築には予想外の費用がかかることが明らかになり、計画が再検討されることになったため、「新潟の町屋を生かす会」が結成され、市民による計画支援の募金活動が始まりました。現在、とりえず移築可能な形での解体が行われることが決まっています。移築の最終的な実現にむけて、今後も募金活動は続けられます。支援された方は移築実現後の建物に墨書で名前が記されます。また、移築後一般に開かれた形での活用を同会では提案し、学校と話し合っていく考えです。

詳しい情報は「新潟の町屋を生かす会」事務局・大倉まで

TEL.&FAX.025-260-4342

ホームページ <http://www.najirinet.com/ikasu.machiya.html>